

審査結果の要旨

論文題目「ブルガリア前期青銅器時代土器の編年と地域間交流：デャドヴォ遺跡の資料分析を中心として」

学位申請者 千本 真生

本論文は9つの章を4部として構成され、巻末に133点の図、12点の表を配し、南東ヨーロッパの先史時代、とくに前4千年紀後葉から前3千年紀末の前期青銅器時代ブルガリアにおける文化変化の背景にある人々の交流を物質文化から読み解くために、従来の基盤をさらに充実させ、それにもとづき交流の具体像を描くことを目的としている。主たる資料は土器である。土器は当該時期に各地で多数出土し、なおかつ様々な場面で用いられる道具であるため、人々の活動を通時的、共時的に見るのに最適であり、また申請者自らが調査に参加し整理を手がけたデャドヴォ遺跡出土の高精度の情報を持つ土器資料を中心に据えた研究が可能だからである。

第1部序論では、第1章で研究目的ならびに分析対象を土器とする理由を述べ、第2章で先行研究をまとめ、問題の所在を明確にし、本研究での分析方法が提示された。

続く第2部でブルガリア前期青銅器時代の土器編年研究をおこなった。第3章では、上トラキア平野に位置するデャドヴォ遺跡出土土器を層位ごとに正確に押さえ、型式学および炭素年代測定法により絶対年代を明確に示した。第4章では、従来当該地域の土器編年の標準とされてきたエゼロ遺跡出土土器との比較をおこない、広範な地域で使用可能な年代的指標資料を明確にし、上トラキア平野東部におけるより精度の高い土器編年を提示した。さらに第5章では、それにもとづきブルガリア各地の66遺跡資料の年代的位置を把握し、土器の地域性の解明を試みた。

第3部では土器を資料としてより具体的に人々の交流について考えた。第6章で、上トラキア平野における前期青銅器時代の始まりを、その最初期の土器であるエゼロI期土器の成立過程を考察することを通じて論じ、第7章で、当該時期の土器がどのように生産されたのかを解明するために、デャドヴォ遺跡資料を対象として胎土分析を実施し、原料の産地推定をおこなった。また第8章では、やはりデャドヴォ遺跡から出土した縄目文土器を資料として当該文様土器の上トラキア平野東部への出現および展開過程とその歴史的変遷を考察した。

最後に第4部を結論とし、第9章を置いた。第2部、第3部で述べた内容を踏まえ、前期青銅器時代土器の分布状況をもとにブルガリアにおける地域間の人々の交流の枠組みを推論し、さらに本研究の結果より具体的となった課題と展望を述べた。

本論に対する審査は、委員会を、2014年10月25日(土)(13:30~15:00)、同12月5日(金)13:00~15:00)、2015年1月15日(木)(16:40~17:20)の3度開催し、その間、第2回審査委員会に合わせて学力試験(専門知識の確認とブルガリア語の学力)、さらに2015年1月15日(木)に公聴会(15:10から、本学14号館412教室)を実施するという形でおこなった。

これら一連の委員会での検討、さらに公聴会での質疑応答を通して、本論文は主に下記の4点で評価すべきとされた。第1は、ブルガリア上トラキア平野の前期青銅器時代の、より精度の高い土器編年を明確な根拠を示しながら提示したことである。当該地域の同時期の土器編年は、従来その根拠とした資料が明瞭にされてこなかったが、本研究では、デャドヴォ遺跡の正確で豊富な層位的情報や精密な土器研究を基礎としてそれをおこなったのである。そのうえでさらに周辺66遺跡の土器資料との比較もおこない、黒海北西域の広域土器編年表を作成し、周辺地域との交流関係等を考察する土台を整えたことが第2点目である。3点目は、これらの土器編年表を基本として、個々の出土土器の胎土の観察、調整技法の観察等を通して、周辺地域の土器との比較を

おこない、土器製作者たちの交流を考察し、土器を通じて、人々の活動、移動などをより詳細に描いたことである。土器の胎土分析研究はブルガリアではほとんどおこなわれていないが、日本などでは基礎的な情報を提供できる重要な方法とされており、本論で示された考え方は、今後当該地域の他の研究者の指針となるであろう。また、土器表面に施された縄目文の施文原体の観察と比較にもとづく考察も縄文土器研究が盛んな日本で開発された手法であるが、以上の諸法をブルガリアでの考古学に応用した点は独創的である。これも当該地域の考古学のスタンダード的研究法の一つとなることであろう。評価点の第4点目は、ブルガリア国内にあってすら、関係諸遺跡の遺物の観察、各遺跡の調査情報の収集が容易ではないという研究条件であるにもかかわらず、時間をかけ地道にまた丹念に資料収集をおこない、当該地域の研究者がこれまでなしえなかった研究の基盤を整えた点である。

ただし本研究を経て、今後追求せねばならない課題もより鮮明となった。第1、本研究では明確に述べることができなかつた点であるが、土器編年が成立する背景にある人間活動とは何であるかをより詳細に考察し、土器を資料として社会を語る方法を確立せねばならない。第2、今回は土器だけを資料としたが、人々の交流、諸社会の成立を語るのであれば、他の様々な物質文化を対象とした研究をおこなわねばならぬ。第3、本論では明確な主題とはされなかつたが、ブルガリアの青銅器時代成立を考えるうえでは、その直前の「移行期」と呼ばれる1000年近く続く遺跡未発見時期を経た後に多くの集落が出現するという現象についての考察をおこない、その背後にある人間諸活動を明確にする必要がある。

こうした課題はあるものの、上に述べてきたように、本研究によって示された土器編年、新たに紹介された独創的な土器の研究法は今後のブルガリア地域の青銅器時代研究の基盤となることは間違いなく、今後続く研究はさらに深まるとともに、ブルガリア考古学のさらなる発展に寄与できると期待できる。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員全員の一致で判定された。

したがって、申請者 千本 真生は東海大学博士（文学）の学位を授与されるに値すると判断した。

論文審査委員

主査	博士（文学）	松本 建速	文学部教授	（文学研究科史学専攻）
委員	文学修士	金原 保夫	文学部教授	（文学研究科史学専攻）
委員	文学修士	禿 仁志	文学部特任教授	（文学研究科史学専攻）
委員	文学修士	近藤 英夫	文学部特任教授	（文学研究科史学専攻）
委員	Ph.D.	三宅 裕	筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻教授	